山崎郷土報

No. 49

52.7.20

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩（十）

島田　清

二、池田輝澄時代　（続九）

池田輝澄が、「今儀の御為第一」という立場から勘忍することを承知した結果、老中たちの協議は一決し、処分が発表された。その第一は、渡辺靱負殺害犯人河合又五郎の実父、河合又右衛門の引き渡しである。『存採叢書』所収『池田輝澄之記』に次のごとく記している。

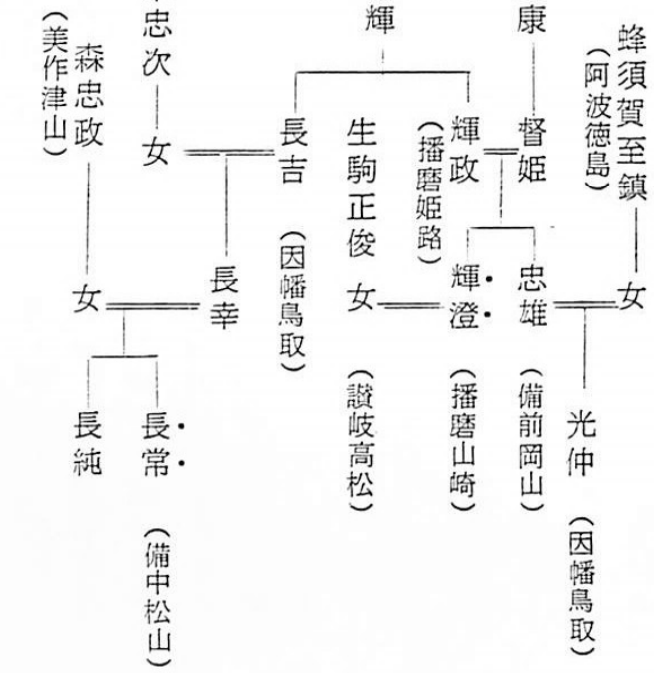
〃御公義ヨリ、三人へ、走込又右衛門事、石見守へ可渡事ヲ被仰付。石見守ヘモ、走込又右衛門コト可請取コトヲ被仰渡有。依テ、一門ノ中、池田出雲守長常、又右衛門ヲ請取ル。〃

この「三人」というのは、いうまでもなく、旗本の暴れん坊、坂部三十郎・久世三四郎・安藤治右衛門である。東照神君の外孫で、岡山藩三十二万石の大守という松平忠雄から掛合われても頑として応じなかった三人衆だが、「公儀の命令」とあってはそむくわけにいかない。いよいよ、河合又右衛門を渡すこととなった。受取人は、公事（訴訟）をおこした輝澄。幕府からの引取り命令も輝澄に対して出された。しかし、こうした場合、輝澄自体が請取ることは相互に感情のしこりがあるから、一門のうち、適当なものを使に立てるのが通例である。池田家では、この役に出雲守長常を選任した。長常は備中松山

目　次

近世初頭の山崎藩……島田　清……一
千本屋廃寺発掘調査はじまる……五
明治以来百年の年譜……堀口春夫……七
巷説　お伊勢参り……福井託二……一一
郷土研究会五十二年度の方針……一二
史跡・古文書などを大切に保存しましょう……一三
〃史跡部〃だより……一四

城六万五千石の城主、このとき二十四才であった。祖父長吉は輝政の弟、関係系図を記すと次のようになる。



長常の祖父長吉は、常に輝政と行動を共にし、慶長五年（一六〇〇）の関ケ原合戦にも功を立て、鳥取城六万石に封ぜられた。兄の輝政が播磨五十二万石の大守になったのと相応じ、山陰山陽連結して中国路の外様大名を制圧する布置に就いたわけであるが、この態勢は、二年後の慶長七年、さらに強化された。すなわち、備作の大守小早川秀秋が急死し、除封されたあと、備前二十八万石は五才になったばかりの輝政の次子忠継（母は督姫、すなわち家康の外孫）に与えられ、美作十九万石は森忠政に与えられた。忠政は、織田信長の寵臣、蘭丸・坊丸の弟で、長兄長一の妻は池田輝政の妹である。長一が、天正十二年（一五八四）の長久手合戦で戦死したあと、末弟の忠政が遺領を相続した関係で、池田家とは特に親密であった。

慶長十五年、輝政の三男忠雄（母は同じ督姫）に淡路六万石が与えられた。しかし、まだ、九才になったばかりなので、忠継とともに姫路城に起臥し、政治・軍事の支配は総べて輝政にゆだねられた。因幡ー美作ー備前ー播磨ー淡路、という日本列島横断壁はこれで一段と強化され、西南日本の豊臣恩顧大名と大阪城との紐帯に大きな契（くさび）が打ちこまれた。淡路と紀淡海峡を隔てて相対する紀州の領主浅野幸長は、また、池田輝政の妹を正室としているので、さきの防遏壁は、さらに紀伊まで延びるこ

食料品一切卸問屋
㊂ 寺田商店
山崎町紺屋町　電②〇〇〇五

ととなり、大阪城は完全に孤立した。関ケ原戦後における家康の大阪城包囲作戦は遠大かつ綿密に計画され、巧妙に実行された。愛甥輝政がその中核となっていたことは明瞭で、輝政自身、

〃関東・大阪の間に風雲急を告げる事態が起きた場合、大御所の出馬をまたず、輝政一手に引きうけて処理する覚悟〃

と、内々言上していたほどである。

慶長十八年正月、輝政は急逝し、この意図を具体的に示すことは遂にできなかった。しかし、翌十九年と元和元年（一六一五）の両役で、豊臣氏は滅亡した。家康も、宿志を果して安心したのか、その翌年になくなった。一つの時代の幕はこうしており、ここに「元和えん武」と呼ばれる新時代を迎えたのである。元和三年の諸侯大異動は、もとより、大阪両度の役に対する論功行賞ではあったけれども、同時に、新しい時代をはじめる第一布石でもあったのである。

このときの異動で、鳥取城の池田長幸（長吉は慶長十九年に病歿し、あとを嫡子長幸が相続した）は備中松山城六万五千石へ、姫路城の池田光政は因伯両国三十二万石へ移り、淡路六万石は阿波の蜂須賀至鎮に与えられた。岡山城主池田忠雄の室にこの至鎮の女が迎えられ、山崎城主池田輝澄の室には讃岐高松城主生駒正俊の女が輿入れした。池田氏と、それと婚を結ぶ諸侯が、四国の東部から東北部、さらに瀬戸内海を越えて備前・美作・因幡・伯耆と、南北を横断するようにまとまっている姿は、また、この時代の政治的配慮を反映するものといってよかろう。池田氏の去った播磨の中部と東部に、徳川四天王随一の本多忠政とその女婿小笠原忠真が入り、畿内の外辺を固めたのも、新しい時代のはじまりを意味するものであった。

これより十五年を経た寛永九年（一六三二）八月二十六日、長幸は四十六才で歿した。あとを継いだ長常は、このとき、二十四才であったが、たまたま起った河合又右衛門引渡し事件の請取人となったのである。

ついでに、このあとの長常について述べておくと、翌寛永十年（一六三三）出雲国松江城主堀尾忠晴が卒して

山崎中央商店街
堀口写真館
結婚式場 楠風閣
農協会館出張

嗣子がなく、国除されたときに命を受け、松江城に赴いて守衛し、同十五年には備中国成羽に在番した。又、十八年には、江戸城の紅葉山および西ノ丸市カ谷の石垣普請を手伝ったが、この年九月六日、三十三才で歿した。長幸は少年時代より病弱であったため嗣子がなく、家は断絶した。

それでは、河合又右衛門を請取った池田輝澄は、これをどのように処置したか、『存採叢書』の『池田輝澄之記』をひもといてみよう。

〃輝澄ノ曰、本懐ヲ遂ル上ハ、又右衛門ニ意趣ナシ。追放スベキニ成。然ル処ニ、蜂須賀蓬庵老、仰ラレテ曰、此又右衛門コト、始終六ケ敷曲者ナリ。予預リ、国本へ遣ベシ、トテ請取、則、家来ニ云付、道中、海路ニテ害、可捨由ヲ下知ス。蓬庵老ハ、忠雄の舅ナリ。〃

河合又右衛門の身柄を請取った輝澄が、「本懐を遂げた上は、又右衛門に意趣なし」として追放処分にしょうとしたことは、この事件に対する輝澄の考え――延いては、この時代におけるこの種事件への当事者の考え方――を見る上の興味ある一言である。

そもそも、この事件は、忠雄の家来であった河合又五郎が、忠雄の寵臣、渡辺の靱負を斬って逐電したことに端を発し、又五郎が駈けこんだ旗本三人衆がこれをかくまい、引き渡しを要求した忠雄に対し、又五郎の実父と交換に引き渡すことを返事し、忠雄より又右衛門を渡すと手のひらを返すように又五郎の引き渡しを拒絶したことから一気に爆発したものである。この時代が、大名・旗本対立の最高潮期にあったことも大きな原因であるが、事の筋道からいえば、旗本三人衆のやりかたは、兎に角、無茶だ。　忠雄が激怒したのも無理はない。　しかし、そうした点を明瞭に指摘し、やめさせられないところに、この時代の政治情勢、あるいは社会事情のあったことを知らねばならぬ。事件が複雑化し、深刻化した根本原因はここにあったといってよかろう。それが、種々の曲折を経ながらも、一応の筋を通し、当然あるべき方向に落ちついたのであるから、いわゆる「一件落着」であり、関係者たちも安堵の胸を撫でおろしたことであろう。輝

和洋酒食料品販売
八百福商店
山崎町山田 TEL②〇四一三

澄にとってみれば、兄の藩中に起った事であるから直接の関係はないが、臨終に際して、「必ず又五郎の首を墓前に供えよ」との執念のこもった遺言をのこしていることを思うと、その結末をつけねばと考えて公事を起し、成功させたのである。したがって、一応の満足すべき結果が出た以上、己れにおいては、別段の意趣はない、ということばも、充分、首肯できる。

「追放スベキニ成」という処置は、こうしたところから出たのであった。ところが、それに対して、「待った」をかけたものがある。蜂須賀蓬庵老だ。「老」の字がついているとおり、隠居の身分であったが、どうしてそれを止めたか、また、蓬庵とはどんな人物であるか、次には、それを述べねばならぬ。

千本屋廃寺発掘調査はじまる

中国道山崎インターチェンジの南約三百メートル、町道の交わる付近（千本屋の内、庄堺）に従来から古瓦や土器の出土する地域があり、千本屋廃寺として白鳳時代から奈良時代の寺跡とされてきた。

今回の発掘調査は寺域確認調査と町道拡幅計画に伴う調査を合わせて、二月二十五日から三月三十一日まで実施された。

古代の寺院建築では今の瓦より重い瓦を使っているため、建物自体が相当の重量となるので、それを支える基壇（土台）がつくられる。発掘の手がかりとして水田の中にある薬師堂（水田より高約一メートル）が基壇の名残ではないかと推定されたこと、その西の水田に一部耕作不良のところがあることなどを考慮して発掘がすすめられた。ところが、薬師堂の高まりについては瓦の出土が少なく、版築も粗雑につくられ、創建当時の基壇ではなく後世のものと判断された。一方、その西の水田の発掘では瓦の列や石組みがみつかり、それらから建物跡（東西約十四メートル、南北約九メートル）が検出された。

そこで、その建物跡が何にあたるかであるが、寺院建造物の配置（伽藍配置）は基本的には、仏舎利（釈迦の骨）を納める塔、仏像を安置する金堂、僧侶が集まる講

新才会ピアノ教室
山崎町庄能一一九ノ一一
電話 ② 三六八六

堂、さらにそれらに付属する僧房、回廊、門などがありその伽藍配置は時代の流れにしたがって変化している。今回検出された遺構はひとつであり、相関関係がわからず今後の調査に待たざるを得ない。

つぎに出土した遺物をみると多量の瓦と一部須恵器があり、瓦にはそれぞれ布目がついていて、丸瓦、平瓦に分かれる。中でも軒の端につかった軒丸瓦、軒平瓦はその装飾に各時代特有のものがみられ、それが用いられた年代を推定する鍵となる。千本屋廃寺でみつかったのが複弁蓮華文軒丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦でこの寺を奈良時代とみることができる。

その他の発掘地点では揖保川の氾濫のあとがみられ、遺構があったとしても破壊されて現在では判明できない。

古代の千本屋廃寺とその周辺を考えると、今から約一二五〇年程前に書かれた「播磨風土記」には当時の里と村について記されている。里というのは行政的に設定された「戸」を五〇合わせて一里とした村落のことであり、村とは里と違って自然村落のことをさすと、一般に考えられているが、これによると、今調査を進めている千本屋廃寺の周辺は、奈良時代の初期の頃はあまり人が住んでいなかったと考えられる。このことは、後で述べる条里遺構との関係からもある程度うかがえる。

この廃寺に南接している雨祈社についていうと、現在貴船神社と呼ばれ、魔虫除けすなわち蛇のマムシを祀った神社として知られている。ところがこの雨祈社は今から一〇〇〇年前に書かれた「延喜式」という本に、名神としてあげられている。名神とは、奈良時代後半から霊験あらたかとして、国家が祀ることを決めた新しい神と一般に考えられている。このことについて、これも約一二五〇年前に書かれた「常陸風土記」をみると、湿地帯の開発を指導した人の子孫が、蛇を祭神として祀ったという話しが残っている。

このことを古代の揖保川と千本屋廃寺と引き合わせてみると、千本屋廃寺の周辺では、揖保川が氾濫して湿地帯をつくっていたと考えられる。上記の「風土記」から考察して、奈良時代後半から急速に千本屋廃寺周辺の開発が進んだことを意味する。この地方の開発が進められ、人々が住むようになるが、これに先立って、奈良時代の初めには寺を建立するような勢力を持った豪族が住んで

和洋酒・食料品
城内商店
山崎町東鹿沢　電②〇三六九

いたことが千本屋廃寺によって知られる。

千本屋廃寺と雨祈社とどちらが先に建てられたのか、ということについては現在明らかではないが、これらはいずれも当時の人々の精神的な支えとして、また文化の中心地としての意味をもっていたものと思われる。

この開発と関連して、条里制を考えると、奈良時代の前後から始められたものであるが、現在残っている遺構がいつの時期に造られたものかということについては、いまだ明らかではないが、古代の社会を考えるにあたっては、見逃すことのできない非常に大切な問題である。

この条里制と関連する問題として、考えなければならないことが二つあり、その一つは条里と寺との関係がどうなるかということである。現在のところ、その存在の確認できた千本屋廃寺の方向は、条里の方向と合っているので、この地方の条里ができてからこの寺が建てられた可能性があるわけである。問題はこの寺の範囲だが、これについては調査がまだ着手されたばかりのことでもあり、今後の成果をまたねばならない。

今一つの問題は、千本屋地区にある条里遺構が他の地区のものとは方向が異っているということで、この条里の方向の相違については住んでいた民族の違いによるものなのか、議論のあることだが「風土記」「雨祈社」さらに氾濫などのことを考えると、少なくとも他の地区とは、やや異った地として、奈良時代の初めに位置していたことを反映したものとみることができるのではなかろうか。

以上千本屋廃寺については、いうまでもなく、古代の村落や雨祈社についても、また条里遺構にしても、いずれも未解決の問題である。したがって千本屋廃寺を歴史的に正しく位置づけることは目下の急務である。そしてこれらの問題の解決には町民の皆様のご理解とご協力が必要ですのでよろしくお願いいたします。

明治以来百年の年譜

堀口春夫

明治元年（慶応四年）（一八六八）

一月二日伏見鳥羽の戦いに端を発し戊辰戦争起る。一月十三日本多忠明藩兵を率

明治二年　い上洛、御所警備の任に就く、九月明治と改元。二月、本多忠明帰国前藩主忠隣隠居、忠明藩主を襲封す。同年六月版籍を奉還、各藩に藩知事を置く、山崎藩主本多忠明藩知事に就任。知事侯と称す、大参事（家老）小参事（奉行）を置き藩政を行わしむ、藩兵洋式調錬を操錬す。

明治三年　九月平民の氏姓を許し、武士の官名を禁止す。（右衛門、左衛門、右兵衛、左兵衛等、兵部省の官名を付す者改名）

明治四年　七月各藩主を東京に召し諭して藩を廃し県となす。山崎県と称し藩主本多忠明を山崎県知事となす。十月川東に農民強訴有り、一揆の徴候あるをもって藩兵鎮圧におもむく、隣藩の加勢領境い迄出兵す。（俗に平山騒動と言う）十一月山崎県を廃し姫路県の管下に入れ、間もなく飾磨県と改称せらる。旧知事侯東京に引越す、森岡昌純飾磨権令となる。県は山崎町本多氏旧政庁に第三出張所を置き、宍粟郡佐用郡の事務を行わしめ、所長に大国英定を任ず。

和洋酒
食料品卸問屋
三輪又商店
TEL②一一七三

明治五年　出張所を廃し播磨の国を十六大区に分ち、宍粟郡は第十六大区にして郡内を九小区に分ち、小区毎に戸長副戸長及試補を置き、各大学に保長を置き政務を行わしむ、当山崎町は第二小区にして、戸長の事務所を集会所と言う。壬申戸籍を作成す、同年城取壊し令に従い鹿沢城の表門と裏門を壊し土堤を崩し中堀を埋めて水田となす。政府は役職就任者以外の旧士族の禄を廃して帰農、帰商を奨励して開散を進める。同年七月学制頒布さる。全国を七区の大学区に分ち、大学区を三十二区の中学区に分ち、中学区を二百五十の小学区に分ち、本郡は第三大学区第三十番中学区に属す。当時山崎には、分校支校合せて五ケ所に、訓蒙学校（青蓮寺）小

竹辺学校（光泉寺）文友学校（妙勝寺）郁文学校（随陽寺）溪流学校（門前）の五校と、旧藩学、思斉館を思斉小学校と改称した士族の学校とが有った。同年山崎に郵便局が創立す。

明治六年　一月一日太陽暦実施（当地方はまだまだ旧暦）、徴兵令布告。

明治七年　十一月戸長集会所を区務所と改称す。

明治八年　七月九小区を併合して四小区となし、区毎に区長及副区長を置き、各村に戸長を置く、戸長の事務所を戸長役場と云う。

明治九年　一月十日従来小規模であった山崎地区の五校と思斉小学校が合併して一校とし、旧藩士の奔走により本多氏の旧藩邸を仮用して一校を設立して篠陽小学校と名付く。山本直方主座（校長）に就く。同年

書道用品
結納用品
志水成文堂
山崎町さつき通り一丁目
電話 ②〇五四七・四三〇五

明治十年　断髪廃刀令出さる。生活困窮せる失業士族を救済する為政府は金禄公債を発行す。同年八月飾磨県は兵庫県に合併す。西南の役勃発す。旧士族抜刀巡査応募に多く志願す。

明治十一年　失業士族の金禄公債を元に士族授産所大成社が結成さる。織物を主とし、女子は養蚕、製糸、機織に従事し、男子は、繭の仲買、桑畑の開墾に従事す。旧城内の武器倉を開放して織物工場とす。

明治十二年　郡区改正行われ、従来の大小区を廃し、郡長を置き、之を統轄し、町村は組合を設け戸長之を管理せしむ。安原昭之初代郡長となる。戸長役場と郡役所を、山崎町本町の元町役人会所に設ける。同年元竜野警察所轄山崎巡査交番所と称せし頓所、山崎警察分署となり、初任の分署長に元大村藩士族山田丈太郎一等巡査拝命さる。同年竜野区裁判所山崎出張所が山崎町門前に出来る。（登記所）

明治十三年　元山崎町山田に有った伊藤塾と、須賀の学校が合併して徳潤学校と称していたのが、篠陽小学校と合併す。同年上の山稲

明治十四年　荷堂の前に石の五重の塔が出来る。山崎町寺町元泉竜寺跡空地に劇場朝日座が出来る。同年八月十日山崎警察分署長山田丈太郎氏賊徒の為殉職す。

明治十五年　旧藩士遠藤亘氏旧鹿沢城の大手門勢隠しの石垣や、裏門の土堤を崩し城下へ通る新道路建設に乗り出す。完成後遠藤坂と称す。同年旧城内の米蔵を春安へ移し小学校運動場を拡げる。

明治十七年　華族令により旧藩主本多貞吉氏、子爵を賜る。同年警察分署の庁舎山田町に新築せらる。又同年上の山稲荷堂に町内有志により、備中高松の最上位経王菩薩を分置し、石垣を畳み境内に小公園を造し最上山と称す。

明治十九年　竜野警察分署より独立して山崎警察署となる。山崎町鹿沢にあった山崎小林区署兵庫大林区派出所となる。同年二月野口弐貫氏郡長となる。

明治二十年　篠陽小学校に尋常と簡易の両科を併置す。

明治二十二年　明治二十一年四月法律第一号を以て町村制が定められ、明治二十二年山崎町制が実施され、自治団体としての基礎が定まる。安原昭之氏初代町長となる。大野親温氏郡長となる。又士族授産所「大成社」近年漸次衰退していたが同年遂に閉鎖す。同年町の有志を以って私立宍粟郡教育会創立し当時本郡教育の普及改良を図る。又大日本帝国憲法、皇室典範公布さる。法律第三十六号を以て郡制が発布せられ、本部に於ては明治十七年以来全町村聯合会を設け、教育、勤業、土木、衛生等の事務を郡制施行以来は漸次此等の施設の経営に移す。同年前年大成社閉鎖後各町町聯合で町村費を以て、養蚕伝習所を開設し蚕業を指導す。十月教育勅語発布さる。

明治二十三年

明治二十四年　五月篠陽小学校、簡易科を廃し、尋常科に合併、篠陽高等小学校を設置す。同年

純喫茶
エンゼル
山崎町山田
TEL②〇九〇九

明治二十五年　金融機関として、宍粟山崎銀行が設置される。濃尾地方に大地震起る。

明治二十六年　笠井彰氏郡長となる。

明治二十七年　山崎勤倹銀行が設立さる。東鹿沢元家老小野屋敷跡に天理教分教会設立さる。国歌「君が代」制定さる。篠陽小学校の校舎改築竣工す。当時西の空に彗星現われ変事の噂有り。日清戦争起る。同年六月黒住教会荒神さん下に建つ。同年郵便局、山崎郵便電信局と改称せらる。同年十二月武間謙氏郡長となる。

明治二十八年　岡本新氏山崎町長となる。

巷説

お伊勢参り

福井託二

旧冬奈良の知人宅を訪問した際、その家の左前角に立つ一基の石燈籠が目についた。総高一米五程の花崗岩製である。造立は文政五年五月で、上部は四角な火袋作り。右側におかげと大きく彫り込んである。山崎地方では、おかげの文字は全然なく産土神に奉納した普通の石燈が殆んどである。友人の説明によると、昔から連綿と続いた伊勢大神の遷宮祭も、時の動乱と世相の荒廃とに途絶えていたのを、熊野の尼僧慶光院清順尼の努力で天正十三年（一五八五）旧態通り、正遷宮祭を行うことが出来たのであると云う。この目出度い年から数えて六十一年目毎におかげ年と称しておかげ参りが流行しだした。その記念碑がおかげ石燈とおかげ道標である。

この奈良は、伊勢にも近く外泊の日数も少なくて済み、小人数でも可能である。

又、二十人三十人と誘い合せ、何々連中、何々講中と名づけ鉦や太鼓で打ちはやし、道中村々の接待をうけながら伊勢路を賑やかに続けたのである。若し旅銀のなくなった者には、村の組長役に申せば一晩や二晩位は接待所で泊めてくれ、次の接待所まで送って貰える手順があったのである。時に酒癖の悪いのが、連れはとっくに発ったのに愚図ついて居るものには、土地の代官が、本人の懲りるまで接待所の下働きに奉仕させられた由である。それでも国元送りにもならず、おかげ参りだけはさせて

くれたのである。

おかげ参りの全盛、文化文政時代に伊勢境まで石燈と道標は、優に百五十基も立っていたとの話である。おかげ参りの廃れた明治の初年頃は、歩く苦労が汽車の開通に取り代ったのである。

ところで、わが山田村でのお伊勢参りは、明治二十三年三月に一度あったのを、亡父から聞き伝えでかすかに覚えている。同行十一人で名前は省くが独身ばかりの若衆。肝入り役は西川万蔵さんで、親が不安がって反対して許さないのが三人あったが、肝入役が何回も足を運んで交渉し、円満に決った由である。又別に、当時抜参りの手段もあって、黙って抜けて行き無事に帰れば今までの心配ごとはご破算して許してしまう仕組である。

万蔵さんの采配で、出立ちの朝、闇いうちに八幡神社に道中安全祈願の上、各人一人づつの見送り付きで、舟元庵寺岸から舟で須賀へ、安志、福崎、北条と裏街道を京へ鈴鹿へと伊勢を目指したのである。行く途中、淀川べりで当時流行していた、エージャナイカエージャナイカの庶民信仰の道中練りの連中に出合ったと云っていた。

伊勢神宮は二晩泊って本望果し、帰りは京見物に一泊し、道筋ちがいで大阪へは寄らず、先き触れで知っている子供達に安志峠でむかえられ、肝入万蔵さん前庭で身直しをして、すぐ八幡神社でお礼報告を済まして、村の倶楽部で壮途目出度完了の祝盃をあげたのである。

亡父の話では往復十五日間だったと云っていた。ゆっくりしたお伊勢おかげ参りだったと思う。播州山奥、朴訥一辺の若衆達、行きは良い良い帰りは怖い町村をふり切って帰り着いたのは、伊勢のおかげ参りのおかげと、亡父への消えかけた夢の壮途を未だにまさぐっている。

郷土研究会

五十二年度の方針

郷土研究会の本年度の活動方針が決定いたしましたので報告します。

去年まで郷土研究会は大きく、三部（会報、史跡、研修旅行）に分れておりましたが、五十二年度より、山崎町史の完成、闇斎神社などの関係もあり、次の五部門に分けました。各部門の活動方針は次のとおりです。

☆町史部　山崎町史

が四月に完成し、これまで教育委員会の方で、町史編さん委員会を組織し、七年の歳月を経て、完成したものでありますが、編さんされた史料は莫大であり、町史に掲載されなかったものもたくさんあります。それを整理して、民族資料館に保存し、これから出てくる史料とも合わせて、史料の保存・研究につとめる。

☆企画部　すでに五月二十二日の奈良・飛鳥の研修旅行を実施しましたが、秋に山崎城跡（山崎小学校）を出発し、千本屋・船元・因幡街道・比地の条理など城下地区を中心に地元の史跡について詳しい人を講師として、郷土の歴史探訪をする。

☆会報部　今年は春と秋二回会報をし、会報掲載の原稿を募集しておりますのでご投稿ください。

☆奉賛部　闇斎奉賛を年二回実施し、闇斎神社の管理・運営をする。

☆史跡部　今年の事業はすでに終り、次の三本の石柱を立てました。

船元の渡し場跡　山崎大橋北一〇〇メートル
山崎城内堀の跡　町立図書館の北側の駐車場内
山崎城埋門跡　山崎小学校と山崎中学校の境

また緊急のものがあれば調査し、石柱を立てることにしています。

《役員》

郷土研究会の正副会長・部長・役員は次のとおりです。

会長前野四郎、副会長志水武雄・庄和夫、名誉会長安井淳三、顧問庄静夫・尾崎正一、会計・庶務入江静夫、久保寅夫（教委）伊藤次郎（教委）、町史部々長宇野正、史跡部々長前田連、会報部々長堀口春夫、奉賛部々長三木金之助、企画部々長伊藤親保、監事秦耕三、千本廉治

史跡・古文書などを大切に保存しましょう

私たち日本人は、三千年の歴史をもち、しかも、一国家・一民族・一言語のすばらしい国であります。

山崎町内からも最近、青木からは古い銅鐸が原型のまま発掘されて、県の重要文化財に指定されました。

又「千本屋には昔、大きなお寺があった。」という伝説がありましたので、うわさの土地を学者が発掘してみますと、ここからも千二百年以上前のものと思われる寺の瓦が原型のまま、出てきております。

金谷にも古墳があらわれました。

歴史を知る上で最も大切なこうした物や、処や、文書や、伝説を大切にしましょう。

古い道具は使うこともなく、古い文書は読みにくく、役に立たない様に思われますが、仲々どうして大切なものがあります。大切に保存する様に致しましょう。

〝史跡部〟だより

（五二・三・一）

我が山崎郷土研究会が部制をもつようになった昭和五十年度には、左の三箇所に史跡の標識を建てました。

一、山崎城跡　（石柱・山崎小学校校門外）

二、山崎闇斎先生出身地（石柱・闇斎神社長屋門外）

三、闇斎先生産湯の井戸（木柱・闇斎神社境内井戸端）

次に五十一年度には、左の三箇所を指定。何れも高さ一米の石柱を建てました。皆さん方もぜひ一度、ご覧ください。

四、山崎藩主本多侯屋敷跡（山崎中学校校門内）

五、旧因幡街道（山崎町山田、国道29号東側、岡田秀雄氏方前、旧因幡街道入口）

〝山崎は古来山陰山陽を結ぶ最も重要な地点で、今日の国道29号線は、昔因幡街道といわれたコースである。鳥取から南下して、山崎町の東和通を総道神社から東へ折れ、ここから又東へ、須賀の渡しを渡って、安志・林田を経姫路へ達した。〟

尚この標識と共に、永い間土中に埋れていた昔の道標を、山田の食料品店福井託次さんが、人手を借りて掘り起し、管理していられたのが、最初の位置である。因幡街道が、現在の29号線から分れる処へ建てて頂きました。本会では福井氏の御厚意に対し、会長より別記のような感謝状を贈呈いたしました。

又この昔の石の大きな道標を、現在地点まで移転再建の難作業を神谷の小林石材店小林健志氏が奉仕して下さいました。紙上を借り重ねて厚くお礼申し上げます。

六、揖保川高瀬舟起点舟着場跡（山崎町中広瀬、宍粟橋西詰上流約百米、旧舟着場の上）

〃宍粟郡内で生産された薪炭・米・千種鉄等は、この両岸の出石から高瀬舟に積込み、網干港を経て、高砂。大阪方面へ送られた。毎年九月十日から、翌年六月十日まで、舟や筏が下り、帰路は白帆を上げて遡ったが、大正十二年五月十二日を最後に陸上輸送に変った。〃

昭和五十二年度の史跡指定の標識は次の通りです。

七、船元の渡し場跡（石柱）（船元庵寺前）

八、山崎城内堀の跡（石柱）（北内堀跡駐車場付近）

九、山崎城埋御門の跡（石柱）（山小プールの南西）

尚、前記の山崎町山田、福井託次さんへ前野四郎会長よりお贈りした感謝状は、次の通りであります。

感　謝　状　　福井託次殿

あなたは幼にして愛郷心殊に強く、本会発足後は理事として公私に亘り熱心にお勤めになり、会報にも度々執筆していただきました。先に旧因幡街道の道標が、路傍に倒れ土中深く塵埃に埋れているのを知るや、早速私費を投じて之が発掘清掃に当り自分のこととして管理下さいました。

この度、本会に於て旧因幡街道の史跡指定に当り、その標識建設の何よりの資料として、右道標を欣然御提供下さいましたこと、誠に有難うございました。

ここに感謝状を贈呈し微意を表します。

昭和五十二年一月三十日

山崎郷土研究会々長　前野四郎